

報



會

會 岳 山 本 日

33

月 二 年 九 和 昭

會 と 會 員

藤 島 敏 男

私が日本山岳會に入會したのはつひ先頃のやうに思つてゐるが、考へて見るともう十四五年の昔になる。短からぬ年月である。この間、會員の先輩、友人、知人から有形無形に得たところのものは實に尠くない。そしてそのことに就て私はいつも深い感謝の念を抱いてゐると共に、日本山岳會といふ會は、會員として本當に居心地のいゝ會であると堅く信じてゐる。それ故に山好きな友人や知人でまだ日本山岳會の會員でない人には、入會なきいとよく勸めてみるのだが、入會するとどんな利益があるかといふ質問にしばしば遭遇する。

然し日本山岳會に會員として入會することは、それに依つて享ける利益などを別にして、外に何か意義があるかと思つてゐる。

誰が何と言つても、日本山岳會は日本でいちばん古い登山團體でありその會員中には日本で本當の意味の登山を創め且つこれを今日の隆盛にまで育て導いて來られた本邦登山界の諸先輩を網羅してゐるばかりでなく、現在活躍してゐる有名な人々の多くをもその内に包含し、更に會員が國內の一地方に偏することなく全國に散在してゐることからみても吾國で最も力強い登山團體であると言ひ得る。この日本山岳會の會員たることは、吾國登山界の向上發展のために會が活動するのを、山登りをなす者のひとりとして、支持するといふ點に於て一つの意義を持つてゐるとおもふ。

山岳に關する科學、文學、藝術其他一切を研究し以て健全なる登山氣風の振興を期し且つ會員相互の連絡親睦を圖るといふ目的（會則第二條）を達するために、現在では機關雜誌「山岳」及び「會報」の刊行、「山日記」の編輯などが行はれてゐる。年來の懸案である山小屋建設もいづれ遠からず實現されるであらう。その他日本山岳會として爲さるべき事業は尠くない。之等の事業の遂行に當つて、最も強き力となるものは會員の支持であり、一人でも會員が殖えればそれだけ會の活動力は増大してくるのである。現在一千人に満たない會員數が、せめて五千人或は一萬人にも達して——今日の登山界の隆盛、莫大な登山者數からみて、これは強ち夢想といはるべき數字ではない——吾等の日本山岳會が今よりも大きな活動力を持つことを會員の一人として私は心から待ち望んでゐるのである。

會員籍を有することも勿論會の目的事業に對する支持ではあるが、さらに進んで積極的に會の事業を援助することも會員としてその當然の權利であり又義務ではなからうか。

例へば「山岳」や「會報」の内容を充實せしめるために、會員から現在以上の力が添えられていゝやうにおもふ。昨今の「山岳」や「會報」の内容が物足りないといふのではないが、「山岳」の原稿不足は固疾的であり、「會報」も亦兎角原稿難の傾向があることを仄聞してゐるし、本邦登山界の最も有名な人々を會員にもつてゐる日本山岳會の「山岳」及び「會報」としては、會員の助力により更に高い水準と豊富な内容を期待しても望外の機を受けることはあるまいと考へるのである。

編輯者に原稿依頼蒐集の全責任を負はせて、大多數の會員は高見の見物といふのでは、編輯者の負擔は餘りに過重であることを編輯の衝に當つたことはないまでも、嘗て會務の一端にたづさはり、編輯當事者から

屢々苦衷をきかされた私はよく知つてゐる。

主 要 目 次

★會と會員……………藤島敏男(一)
★研究欄……………
カンタハール……………ピンドウイング……………
……………武田久吉(二)
……………冠松次郎(五)

★新刊紹介……………
横雲期登山……………逸見眞雄(四)
山岳映畫評……………渡邊 漸(四)
★陸地測量部新刊地圖……………(二)
★會務報告……………

第六十一回小集會……………(三)
新入會員……………(三)
退會者……………(三)
會員計報……………(三)
會員住所變更……………(三)
新着圖書……………(三)
會員寄贈圖書……………(三)
會計報告……………(三)
會員住所不明……………(二)

満足な結果は得られない。

勿論、會のためにまた會員のために、多大な努力を割いて、或は研究を、或は考證を、或は紀行を、或は隨筆を寄せられる、感謝すべき會員のあることは、敢て茲にその氏名を擧げるまでもなく、誰もが知るところであるが、しかし、他の新誌紙上

研究欄

カンダハール ビンドウング

武田 久吉

スキーの縮具にもいろいろの考案形式があるものだが、穿いて確實で着脱は簡単といふ特長を持つものに「Zine」といふのがある。例によつて早速日本製の模範品が出来たが、そのまゝの名では差障りがあるとでも思つてか、製録などにはネビヤと出て居た様に思ふ。

處が近頃これを更に改良したとも思はれるもので、Kandahar と銘打つたものが、ツューリッヒのシュタウプから發賣された。飛行機でさへ總金屬製のある世の中だからとあつてか、トウストラップを除いた外、全部金屬製といふ、外觀は如何にもモダンなものである。バックンはハウクのものゝ様に打付けで左右二片になつてゐるから、靴の形にピッタリ合せられる。踵へ周る部分は螺旋式の發條で、それにはエレフゼンの如きビジョは無く、唯兩端に細いケーブルが取付けられ、これがバックンが本部から突出した下を通過前方に廻り、一寸BBB かペーチエンのクランプに似た形の金具で留められ、其處には長きの調節が出来る様、數段の齒が刻んである。着脱に際してはクランプの前方即ちスキーの先端に向いた肘を起すとケーブルが弛み、これを前に倒せば

この簡単に巧者なメカニズムの爲めに、山上の窮屈な場所などでの着脱は、手を廻して踵についたエレフゼンのビジョを脱したり掛けたりするよりもどの位手軽に出来るか知れないのである。そのみでなく、ケーブルがバックンの下を通過の仕組であるが爲め、丁度フィットフェルトビンドウングの様に、靴をスキーにシツカリ引付ける力が十分にある事は、ハウクやその類似のバックンよりは確に勝つて居る。優秀を以て鳴るハウクのバックンも、普通の用ひ方ではこの缺點を除外しないから、山スキーにはジャンプの補助金具をバックンの下につけて、革具がフィットフェルトの様な工合になる様に試みてゐる人さへある。

さてこのカンダハール ビンドウングも、御多分に漏れずして、早速和製品が出現し、クランプに彫られたH. STAUB, Ltd. ZÜRICH といふ極印が、何とかいふ日本名に變更され、それと同時に、使用金屬もオリヂナルのものと同つて、砲金見たやうなものに化けてゐる。

そんなことはどうでも、丈夫で値さへ安くあれば、宛も爲替を履いて滑る様な氣で舶來品を用ひてゐるよりは遙にマシであるが、唯一つ遺憾に思はれるのは、近頃の思想の様に、外國品呑みの擬造をやらないうで、何故日本の山に適する様に改良をしないかといふ點である。

あれ程工夫に工夫を凝した一流の外國品だとして、日本といふ特殊な國に持て来れば、明に國狀に合せて改良の餘地があるものである。それは何かといへば、あの素晴らしいゲレンデを有する中欧や北歐と違つて、我が帝國に於ては、一流のものを除けば、練習場と名のつくものでも、況て山地となると、所々方々にブッシュや笹の程が多少なりと顔を出してゐる。顔を出してゐるのなら未だ避ける手段もあるが、フワリと淺い雪を被つて隠れて居ることが往々あると言はなければならぬ。それとあの速度でスキーをつツかければ、大概の場合蹴飛ばしてしまふには相違あるまいが、その際細い笹とか蔓等があるクランプに引掛つて、倒してある肘を起さない誰が請合つて呉れるだらうか。若しさうなれば忽にして大なり小なりの遭難といふ結果になる。

然しこの缺點を改造して、日本式の超カンダハールに直すことは、極めて容易である。それには二三の愚案もあるが、器具材料製造家の爲め雑誌でもない本會報に、クダしく書き立てることは差當り控へて置く。この點を改良すれば、唯の模

擬品よりは、賣る方にも買ふ方にも有利であることは、斷言して憚らない處である。

★注意

日本山岳會會員の名簿を利用してわが日本山岳會の迷惑となる行爲をなす輩がありと聞く、會員は、會の名簿を會員外の者に貸與せざる様、注意あり度い。

會員は會員章をつけ、必要の場合には、會からお送り致しますメモを御示し下さい。

會員住所不明

左記會員の御住所暫らく不明で事務上甚だ困つてゐる次第であります御當人の方々及び御存じの御方は、甚だ恐縮ですが、お知らせ下されたく御願申上します。

一三八一	東京市	池田	博敬
一二六〇	同	眞井	壽一
三四五	同	松宮	三郎
一二三九	同	石塚	昭雄
一二八一	埼玉縣	小島	一祐
一二一七	名古屋市	森下	薫
九三三	神戸市	田中	與市
八三二	神戸市	小國	正俊
一一一	東京市	高橋	康彦
一四七六	山形縣	古川	房吉

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分ノ一修正
仙臺 十一號 山 形一面
鳥取 一五號 鳥取北部一面

(一頁よりつづく)
に於て餘りにも雄辯であり、「山岳」や「會報」誌上に於て餘りにも沈黙を守られる會員も尠くないのを、私は會員のひとりとして遺憾におもふ。「山岳」も「會報」もそれは編輯者の手のみに委ねておくべきものではなく、會員全體の協力に依つて作られるべきものである。

會費の御拂込願度事

振替貯金拂込用紙添付致して置きましたから、未だ御拂込なき方は御利用願ひ上げます。

『山岳』原稿募集

『山岳』第二十九年第一號の爲めに各位の自備ある原稿をお送り下さい。

三月中理事在室當番順

三	日(金)	逸	見
五	日(月)	茨	木
七	日(水)	飯	塚
九	日(金)	伊	藤
十二	日(月)	神	谷
十四	日(水)	福	島
十六	日(金)	黒	田
十九	日(月)	松	方
廿三	日(金)	三	田
廿六	日(月)	額	田
廿八	日(水)	田	中
三十	日(金)	鳥	山



會務報告

第六十一回小集會

二月八日赤坂三會堂に於ける小集會は午後七時より福島理事司會にて開催。去月廿四日外遊の旅より歸朝された本會副會長松方義三郎氏の講演を伺ひ極めて盛會であつた。

松方氏の講演は次號の會報に一部を掲載する豫定であるが、「ウエストンさんのこと」「英國山岳會の育立の話」「蘇聯邦の登山界の現況」等々、興味多く有益なものであつた。殊にエヴレスト登攀隊員から直接聞かれた種々のお話は、松方氏を通じて我々も亦この感を同くし得る喜びであつた。松方氏が持歸られたウインドジャツケは、エヴレスト登攀隊員の使用せると同種のもので、講演後會員一同手にして精巧さに驚いた。

出席者

木暮理太郎 木村 庸夫 澤 智子
澤井徳太郎 伊藤秀五郎 飯塚篤之助
大澤 照貞 神谷 恭 丹羽 恵
小林 義正 酒井 忠一 小島 久太
佐伯幸兵衛 武田 久吉 高頭仁兵衛
橋本晋七郎 横 有恒 關根 吉郎
松方義三郎 黒田 孝雄 福島 昌夫
國分 貫一 安藤 正一角田 吉夫
淺原 重繼 岡村 孝 櫻井 信夫
飛川 維之 岩崎京二郎 野口 未延

計 六十二人

尾崎 喜八 渡邊 漸 木村 鏡吉
西川 信義 中屋 健次 茨木猪之吉
吉田 竹志 池田 政雄 中司 文夫
中村 太郎 草川 稔 一田中 菅雄
岡本 勝二 渡邊 達三 山本幸次郎
矢作 太郎 木村 一男 箕川 一
本郷 常幸 三田 幸夫
外に會員外十二人

退會者

昭和九年二月中
(二七九) 神奈川縣 關戸 一平
(八〇四) 東京市 寶閣 信孝

新着圖書

記録 第二號 成蹊高校旅行部
山小屋 二月號 朋 文 堂
ケルン 同 同
ツリス トー 二月號
ジャパン・ツリス・ト・ビューロー
つくり 第二號 筑紫山岳會
管見録 一月號 大阪管見社
旅行 二月號 東京旅行クラブ
旅 同 東京アルカッ
旅 一月號 東京山岳會
旅路 二月號 關東旅行クラブ
山行案内 二月號
昭和三十四年二月號
山旅 一月號 八王子山岳會
アルカウ趣味 二月號
日本アルカッ
山 同 横濱山岳會
山彦 同 東京山彦山岳會
樹水 同 山人俱樂部
せふり 同 福岡山の會
ベルグ 一月號 岡山山岳會
歩跡 第五二號 テクニク會
黒木立 第九五號 關東岳愛會

臺灣山岳彙報 二月號臺灣山岳會
田川山岳會々誌 第四號
東京登山溪流會々報 第二號
がくれい會々報 第二十七號
明崇山岳會々報 第二〇號
日本登高會々報 第二十九號
武蔵山岳會々報 一月號
廣島山岳會々報 二月號
OSMC 會報 一月號
RSC 部報 二月號
山と溪の會々報 二月合併號
神戸アヌモ會々報 二月號
スキーコース圖 一枚
ニセコアンヌブリ附近 一枚
札幌、小樽附近 一枚
十勝岳附近 二枚
The Mountaineering Journal, Vol. 2, Dec.-Jan.-Feb. No. 1, 1933-4.
Bulletin Appalachian Mountain Club, Vol. XXVII, No. 5, Jan. 1934.
The Mountaineer, Vol. XXVI, No. 2, Jan. 1934.
Planinski Vestnik, Ser. 12, Leto 1933, Slov. 1 Leto 1934.
Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen Alpen-Vereines 1933.
Natural History, Vol. XXXIV, No. 1, Jan./Feb. 1934.
The Geographical Journal, Vol. LXXXIII, No. 1, Jan. 1934.
Die Alpen, No. 1, Jan. 1934.
Sierra Club Bulletin, Vol. XXVIII, No. 6, Dec. 1934.
Unione Ligure Escursionisti, Anno

會計報告

昭和八年度收支計算報告次の如し。

會 入 四、八六〇、五〇
入 會 金 四、八六〇、五〇
諸 利 息 四、二八、六五
廣 告 料 二、七二、三〇
山 岳 賣 代 四、七八、九〇
出版物印稅及雜收入 四、七九、一六
前年度繰越金 二、〇四、〇六
合 計 八、九八八、五七
支 出
雜誌印刷費 二、〇四六、九三
借 室 料 八四、〇〇
雜誌編輯費 九、九一〇
研究調查費 三、四八五
會 報 費 七、〇二、三三
集會費及役員會費 二、〇九、八四
幻燈版及室内設備費 一、二〇、二五
人 件 費 五、〇〇、〇〇
旅 費 一、六五、七九
通 信 費 四、〇五、七五
印刷物及文具費 二、六八、〇一
雜 費 四、〇一、一六

XN-N. 12, Dic. 1933.

Trail and Timberline No. 183, Jan. 1934.

Cumbe, Ano 1, No. 6, Dic. 1933.

Revue Alpine Section Lyonnaise du C.A.F., No. 4, Année 1933.

會員圖書寄贈

地震 第五卷 十月、十二月
同 第六卷 一月 木村鏡吉氏

新刊紹介

積雪期登山——準備と技術

藤田信道著

収入

四、五〇〇、〇〇

支出

二、二〇〇、〇〇

支

八四〇、〇〇

借

一〇〇、〇〇

諸

二五〇、〇〇

廣

四〇〇、〇〇

山

五〇〇、〇〇

出版

四〇〇、〇〇

合計

六、四〇〇、〇〇

支

二、二〇〇、〇〇

借

八四〇、〇〇

諸

一〇〇、〇〇

廣

二五〇、〇〇

山

四〇〇、〇〇

出版

五〇〇、〇〇

合計

七、〇〇〇、〇〇

支

一五〇、〇〇

借

二五〇、〇〇

諸

一〇〇、〇〇

廣

四〇〇、〇〇

山

五〇〇、〇〇

出版

四〇〇、〇〇

映画「カンチエンチャ

ンガの登高」

ヒマチャール

渡邊 漸

なる判断は下し難い場合が度々あるものではあるが、雪の山に入らんとする程の者は著者の如く倦まざる研究をなす可きであらう。

「氷上技術」は積雪期登山の最高技術であるが本書では簡潔にしかも極めて解り易く記述されてゐるのは何よりである。

「積雪期山岳の危険」で取扱れた雪山はヤングの名著「登山術」でアーノルド・ラン氏が擔當して書かれた「雪山」の章を譯したもの。

尙私は雪中野營に關する著者の豊かな経験を、特に將來性の多い問題として聞きたかつた。

最後に附録として「乾燥雪崩」及び「スキー登山界の回顧」がある。前者は先年「山岳」に寄せられたものであるが、後者は古き殻を打ち破つて新興スポーツの爲めに精進した著者等が十年前の回顧である。積雪期の山も今では簡単に入れる様になつたが、血を以て彩られた本邦スキー登山史を知る者には當時の種々なナセンセも、唯笑つては讀み了へることが出来ないものがある。開拓者のみの知る苦しみだ。本書を繰かれば方は本邦積雪期登山史の一頁として思はず襟を正される事であらう。

とまれ、積雪期登山の技術書が如何にも少い今日、後進者の爲に極めて困難なる指導書編纂をなして登山者大衆の前に捧げんとした著者の熱と努力とは實に貴いものだ。良き指導者をもたぬ登山者の爲にも、また後輩指導と云ふ重任を持つ者にとつても良き参考書とならう。(逸見)

一九三〇年のデイレンフルトのエクスペディションに際して撮影せられたこの映画は、我々としてその期待を完うせしむる程度のものではなかつた。が、恐らくはこれは撮影者たるドゥバンネルの負うべきものではなく、その編輯上のぎこちなさ及び録音の不成功に歸すべきもので映画といふものに根本的な要素を餘りに没却し過ぎた爲に斯る中途半端なものが出来上つたのではなからうか？

我々登山者をしては勿論満足させない映画ではあるが然しその中には大衆的には成功して居るものが少なくない。登山者及び大衆の何れをも満足せしめんとする企ては映画の本質から考へて殆ど不可能の業である。登山者の立場から見ると、この映画の最もよい部分はカン・ラの峠を越してネパールに入り、そしてパングベマにベール・キャンプを定め、カンチエンチャ・ヤング米河からの登高を企て、五月四日には五九三〇米のヒマのキャンプに達し得たが、九日にはあの物凄い雪崩に遭つて、チエタンを失ひ、遂に敗退の止むを得ざるに至つたまでの邊りであつて、あのスケールの大きいカンチエンチャ・ヤングの西面が最も深く印象づけられた。

このエクスペディションに於ける最大の成果たるデヨン・グソン・グビーの登攀にはドゥバンネルは加はつて居ないので、我々はデヨン・グソン・グビーから直ちにローナツクの谷へとカメラは動いて行くものと期待して居たのに、デヨン・グソン・グビーの登攀の明かなるトリックの場面の連続を見るべく強いられしたのは物足らなかつた。

ローナツクの源頭を飾る山々の姿、ゼム・氷河の奥深く秘められたカンチエンチャ・ヤングの東面等我々の見るべくして見得なかつた数多くの場面が餘りにも心残りである。

山の事は何も知らない人間がこの映画を見たとしたら、殆ど全篇を通じて途絶え無しに行程の説明を、ベラ／＼と獨逸語でやられては、さぞ面白くないだらう、と同情させられる。處々に使用せられて居る印度の音楽もどうも獨逸に歸つた後で録音せられたものらしく新鮮な味はひがない。大衆はもつとトリックの場面が多く、然かもそれが完全にトリック化せられて居ない限り、映画としてこれを樂まうとはしないだらう。

登山者の間にはそれが山の映画である限り、その中にトリックの場面がある一寸でもあると、その映画の価値は全くなしと極めつけて仕舞ふ人間が多いが、映画の本質から考へてこれは甚だ愚論である。我々はこの映画を見てそのトリックのあるが故に非難しようとはしないが、そのトリックの扱ひ方が中途半端でつち付かずのものとなつた事を遺憾に思ふのである。

臨時電話架設費 一二九、九一
基本金組入、入會金外 五三三、九六
本年度繰越金 二、二六一、五九
合計 八、九八八、五七
昭和九年度收支豫算次の如し。

収入

四、五〇〇、〇〇

支出

二、二〇〇、〇〇

支

八四〇、〇〇

借

一〇〇、〇〇

諸

二五〇、〇〇

廣

四〇〇、〇〇

山

五〇〇、〇〇

出版

四〇〇、〇〇

合計

六、四〇〇、〇〇

支

二、二〇〇、〇〇

借

八四〇、〇〇

諸

一〇〇、〇〇

廣

二五〇、〇〇

山

四〇〇、〇〇

出版

五〇〇、〇〇

合計

七、〇〇〇、〇〇

支

一五〇、〇〇

借

二五〇、〇〇

諸

一〇〇、〇〇

廣

四〇〇、〇〇

山

五〇〇、〇〇

出版

四〇〇、〇〇

新刊紹介

積雪期登山——準備と技術

藤田信道著

朋文堂發行 昭和八年十一月
四六版三一頁 定價一圓五十錢

從來一部登山者の専有の觀あつた積雪期登山も、今や登山大衆の前に展開されつゝあるが、いち早くこのフレッシュなスポーツに馳せ參じて十年間を實踐と研究に捧げられた著者がその貴い體驗に基いて初心者のために編れた指導書である。

開卷先づ「資格と訓練」及び「スキー合宿」の二章に目が附いた。技術と直接關係なきに係らず應々章を改めて記されたのは著者が特にその重要性を認められた爲であらう。

「資格と訓練」の中に述べられたすべては、積雪期登山の場合のみならず總ての登山家は平常の生活に於て登山の凡ゆる場面に於てその研究と努力を一瞬も怠つてはならぬ鐵則だ。

「スキー合宿」はせずともスキー登山の實力は備へられるものであるが『集團生活』の訓練のためだけにでも嚴格なる組織を持つ合宿は是非一度通過して置くべき過程である。

「山岳スキー術」の教程は、特にスキー滑降技術は、限られた僅少のベリジの中に盛るよりも、寧ろ他日を期された方が良かったに思ふ。

「雪上技術」と雪質の章に説かれた雪質の變化と云ふ自然の微妙なる現象は相當な経験を積んだ者にも明確

なる判断は下し難い場合が度々あるものではあるが、雪の山に入らんとする程の者は著者の如く倦まざる研究をなす可きであらう。

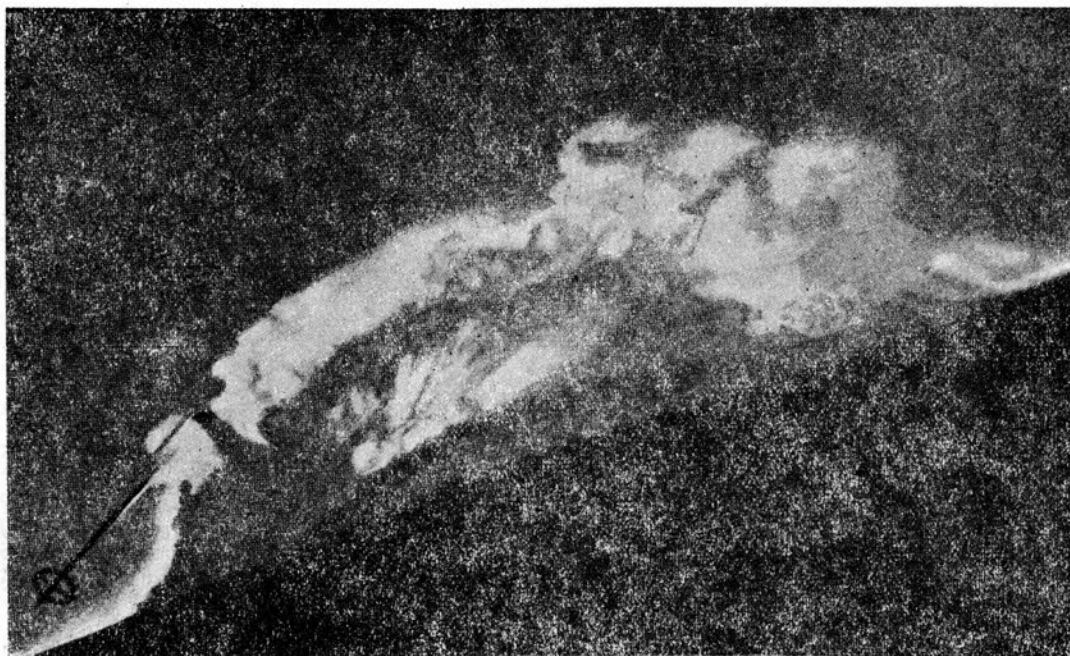
「氷上技術」は積雪期登山の最高技術であるが本書では簡潔にしかも極めて解り易く記述されてゐるのは何よりである。

「積雪期山岳の危険」で取扱れた雪山はヤングの名著「登山術」でアーノルド・ラン氏が擔當して書かれた「雪山」の章を譯したもの。

(旅信)

今年は未だ曾てない程の大雪で、千垣では一丈に近い深雪に階下は皆埋もれ、電車は横江までしか通じないので、一里餘の雪路を歩かせられました。

振替東京五七五七番



セルロイドエツヂスキー

破損し易いスキーエツヂをセルロイドを以つて保護したるもので従來のステールエツヂに比し遙かな輕量とより以上の滑降速度を有して居ります。昨春アールベルグに於てシュナイダー氏を始め同クラブの猛者等に依つて使用され最高の讃辭を贈られたものです。舊いスキーに加工出來ます。

加工料 ￥ 4.00

防寒用スノーコート アノラツクス

山行に缺く事の出來ないもので、雪線に活躍するアルピニストの待望に十二分副ひ得る自信を有するものです。最小の容積と羽毛に比すべき重量を以つて如何なる破壊的な山の風雪にも完全に對抗し得られます。このヒマラヤクロースの有する性能は従來のクロースの企て及ばない最高のものです。

ヒマラヤクロース

上 ￥ 9.00

下 ￥ 5.50

防水地

上 ￥ 6.50

下 ￥ 4.00

神田小川町

美津濃

銀座五丁目



山の思ひ出に
懐かしく織り込まれる……

トーレコヨチ永森

錢十・錢五・ケ一